

# 庄・蔵本遺跡

第36次調査（エネルギーセンター地点）発掘調査概要報告書

2025年11月30日

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室



## I 遺跡の位置と歴史的環境

国立大学法人徳島大学蔵本キャンパスは、徳島市庄町1丁目および蔵本町2丁目・3丁目にまたがって所在し、徳島県遺跡地図（徳島県教委 2006）上では、蔵本遺跡の大部分および庄遺跡の東端を含む範囲に位置する（図1）。本学では『庄・蔵本遺跡1』（北條編 1998）の刊行以降、同キャンパス内の遺跡については、独自にこの名称を用いており、本報告でもこれに従う。

庄・蔵本遺跡ではこれまで36次にわたる発掘調査が実施され、縄文時代から近代にいたるまでの幅広い時期の遺構・遺物が多数確認されている。なかでも、弥生時代初期のそれらについては、集落の全体像を描き出すことが可能なほどの成果が得られており、注目される。その周辺では、縄文時代から近世にかけてのさまざまな遺跡が分布しているが、そのうち弥生時代のものを取り上げると、三谷遺跡、南蔵本遺跡、南庄遺跡、名東遺跡、矢野遺跡などがある。庄・蔵本遺跡の東側に位置する三谷遺跡では、縄文時代晚期から弥生時代前期にかけての貝塚、イヌの埋葬などの多くの動物遺存体が出土しており（勝浦編 1997），近年の調査でもこの時期に属する集落域が確認されている（中村 2016・2017）。庄・蔵本遺跡のすぐ南側と東側に位置する南蔵本遺跡では、庄・蔵本遺跡と一連のものとみなせる前期集落域が確認されている（勝浦 1999、近藤編 2014）。庄・蔵本遺跡の西側に位置する南庄遺跡では、中期後半の居住域が検出され（三宅 1995、中村 2006），そのさらに西側の名東遺跡では、中期後半～後期初頭の方形周溝墓や銅鐸埋納土坑などが確認されている（勝浦編 1990）。鮎喰川左岸に位置する矢野遺跡では、中期中葉～後期前半の居住域が確認されており、ここで検出された銅鐸埋納土坑の所属時期は、後期後半～終末の幅で捉えられている（近藤 2012）。

## II 調査に至る経緯・経過

### (1) 調査に至る経緯

2025年度、蔵本キャンパスの南西部にエネルギーセンターを建設することが計画された（図2・3）。それまでに、建設予定地のすぐ北側の第15次調査地点では弥生時代前期前葉～中葉の二重大溝・河道・用水路、北西側の第9次調査地点では弥生時代前期前葉～中葉の河道・井堰などが検出されていた。そのため、これらに関係する遺構・遺物が、予定地の範囲まで広がっている可能性を想定し得た。そこで、建設工事に先立って、調査員1名による発掘調査を実施した。調査面積は702m<sup>2</sup>、調査期間は2025年4月21日～7月28日である。

### (2) 調査の体制

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・三浦 哉）

調査員 端野晋平

調査補助員 久米淑子、中原尚子、板東美幸（施設マネジメント部・技術補佐員）

作業員 9名

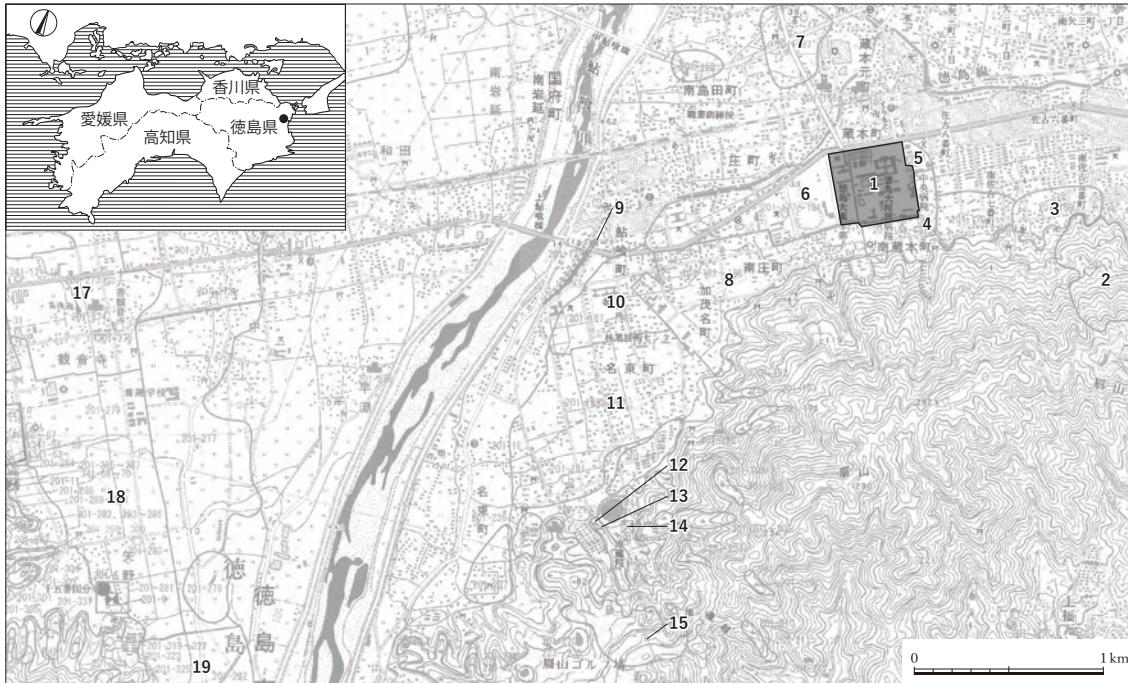


図1 庄・蔵本遺跡と周辺遺跡の位置

1. 庄・蔵本遺跡 2. 蜂須賀家万年山墓所 3. 三谷遺跡 4. 南蔵本遺跡 5. 蔵本遺跡 6. 庄遺跡 7. 中島田遺跡 8. 南庄遺跡 9. 袋井用水の水源地 10. 鮎喰遺跡 11. 名東遺跡 12. 節句山1号墳 13. 節句山2号墳 14. 穴不動古墳 15. 八人塚古墳 16. 敷地遺跡 17. 観音寺遺跡 18. 矢野遺跡 19. 延命遺跡（徳島県教委2006をもとに作成）

### (3) 調査地点の区割り（図4）

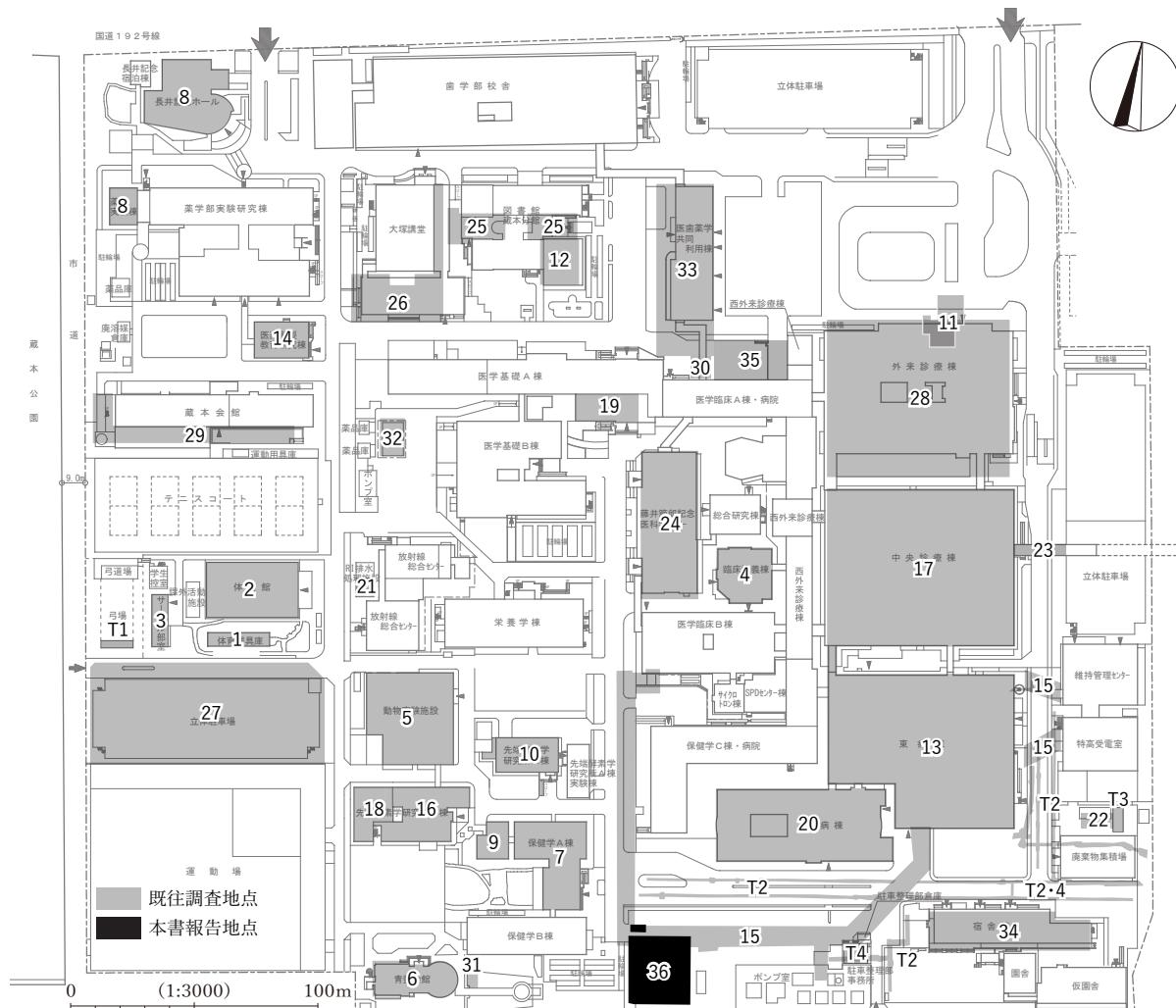
調査は、排土置き場の確保のため、西区・東区の二つに区分して進めた。遺跡の大半が近代以降の開発により失われていたが、西区のパッチ状に残存した箇所をA～D地点、東区のそれをA・B地点と呼び分けて調査を実施した。また、西区・東区から北側に離れて位置する小規模の調査区については、北区と呼称した。

## III 調査成果

### (1) 層序

東区A地点の東壁の土層断面（図5、写真2）にもとづいて、本調査地点の層序を述べると、以下の通りである。

- 1層 灰白色（5Y7/2）シルト。上面の標高は2.80～3.10m、厚さは5～10cmを測る。
- 2層 黄色（2.5Y7/8）シルト。上面の標高は2.70～3.00m、厚さは5～15cmを測る。
- 3層 にぶい黄橙色（10YR7/2）シルト。上面の標高は2.65～2.90m、厚さは5～10cmを測る。
- 4層 暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト。上面の標高は2.60～2.85m、厚さは5～10cmを測る。
- 5層 明黄褐色（2.5Y7/6）シルト。上面の標高は2.55～2.80m、厚さは15～35cmを測る。
- 6層 にぶい黄色（2.5Y6/4）シルト。上面の標高は2.40～2.45m、厚さは10～20cmを測る。
- 7層 にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト。上面の標高は2.25～2.35mを測る。



- 1. 体育館器具庫新營
- 2. 体育館新營
- 3. 課外活動共用施設新營
- 4. 医學部臨床講義棟新營
- 5. 動物実験施設新營
- 6. 青藍会館(同窓会館)新營
- 7. 医療技術短期大学校舎新營
- 8. 長井記念ホール・薬学部実験研究棟新營
- 9. 医療技術短期大学校舎増築
- 10. 酵素科学研究センター新營
- 11. MRI-CT装置棟新營
- 12. 附属図書館蔵本分館増築
- 13. 東病棟新營(病棟I期)
- 14. 医薬資源教育研究センター新營
- 15. 共同溝設置
- 16. ゲノム機能研究センター新營
- 17. 中央診療棟新營
- 18. ゲノム機能研究センター増築
- 19. 医学系総合実験研究棟III期改修
- 20. 西病棟新營
- 21. 医学系総合実験研究棟III期改修  
(RI棟排水処理設備)
- 22. 西病棟新營その他電気設備
- 23. 連絡橋建設
- 24. 藤井節郎記念医科学センター新營
- 25. 附属図書館蔵本分館増築II期
- 26. 大塚講堂改修
- 27. 立体駐車場新營
- 28. 外来診療棟新營
- 29. 学生支援センター改修
- 30. 渡り廊下建設
- 31. 解剖体慰靈碑区域
- 32. 給水設備新營
- 33. 病院福利厚生施設新營
- 34. 寄宿舎棟新營
- 35. 多用途型トリアージスペース新營
- 36. エネルギーセンター新營

#### 【立会調査】

T1. 弓道場的場(1982年度) T2. 排水管・東側溝・南側溝(1998年度) T3. ボイラータンク(1998年度) T4. 駐車整理部ほか(2016年度)

図2 本書報告地点と既往調査地点の位置

本遺跡全体での基本土層（中村 2000 ほか）を顧みると、1層は近世の水田耕作土層、2・3層は中世～近世の堆積土層、4層は弥生時代前期末～中世の土壤化層（黒褐色シルト層）、5層は弥生時代前期中葉～前期末の洪水起源砂層（黄褐色シルト層）、6層は縄文時代晩期末～弥生時代前期前葉の土壤化層（暗褐色粘質シルト層）、7層は縄文時代晚期以前の自然堆積土層と判断される。本調査地点では、2層上面を第1遺構面、5層上面を第2遺構面、6層上面を第3遺構面として、遺構を検出した。



図3 調査地点の位置

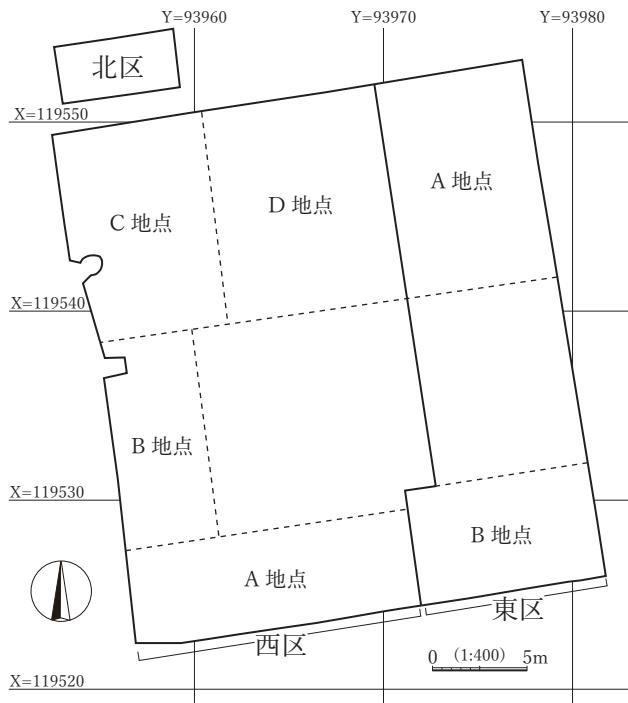


図4 調査地点の区割り

## (2) 遺構の概要

### A 第3遺構面(図6)

弥生時代前期の土坑などが確認された。西区C地点のSK304では、完形の弥生土器の壺が出土した(写真3)。当初、土壙墓の可能性を疑い、周囲を広く精査したが、土器に近接する範囲でしか掘り方のプランを検出しえず、土器のサイズも乳幼児用の土器棺とみるには小さすぎる。そのため、土器の埋納遺構と判断した。土器の内部からは何も出土しなかった。この遺構の所属時期は、出土した土器の時期からみて、弥生時代前期末とみられる。

### B 第2遺構面(図7)

弥生時代後期の溝・土坑などが確認された。西区D地点ではSD207・SK207が検出され

た(写真4～6)。SD207は東西方向に走る溝で、西側で二股に分かれ、Y字形を呈する。二股に分かれた溝のうち、南側のそれはSK207と重複する。SD207は東側にも延び、東区A地点で検出されたSD211・212はSD207の続きと判断される。これらの溝は、断面形がU字形を呈し、埋土は黒褐色シルト一層からなる。流水痕跡は認められなかった。SD212の東壁近くの地点からは、棒状の鉄製品が出土した(写真7)。これ以外には、弥生土器の小片が少量出土しただけで、溝の所属時期を決定しうるものはない。ただ、西側の第6次調査地点で確認された弥生時代終末期の区画溝の断面形や埋土と類似していることから、これと同時期の可能性が高い。居住地の区画や居住環境の向上を目的としたものであろう。SK207は平面形が円形の土坑で、内部からは多量の弥生土器、石器などが出土した。SK207

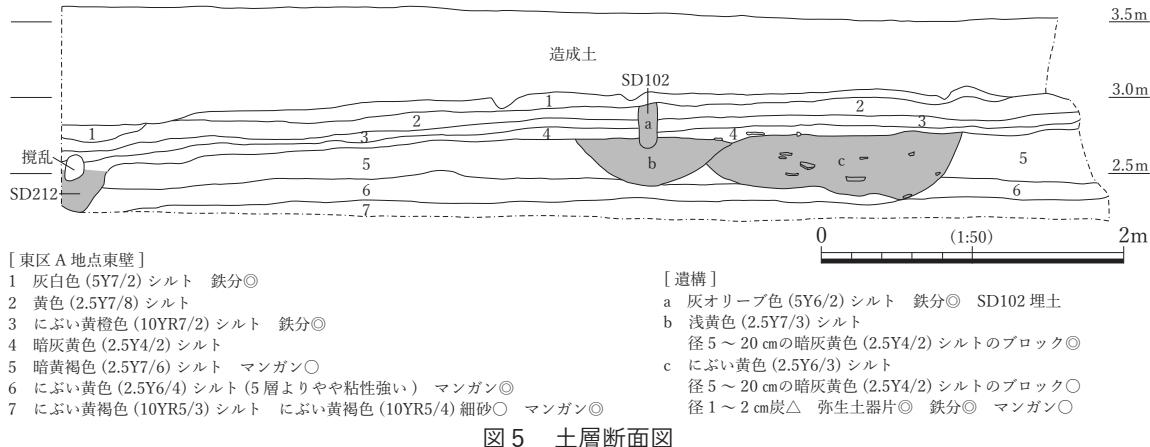


図5 土層断面図

の埋土はほとんどが黒褐色シルトからなり、SD207のそれとは区別が難しく、切り合いで先後関係を認識しえなかった。出土した弥生土器には、前期・中期・後期～終末期のものがある。前期や中期のものは遺存状態が悪く、ほとんどが小片であるのに対し、終末期のものには遺存状態の良い壺がある。SK207の所属時期は、SD207と同じく弥生時代終末期とみてよいであろう。

北区で検出されたSD104は近世の溝で、内部に石組みをともなう（写真8）。本来は第1遺構面で検出すべきものである。内部からは近世の陶磁器、瓦などが出土した。北側の第15次調査地点（本調査地点の北区と西区の間にあたる部分）では、この溝の続きが確認されている。条理地割にともなう南北溝の一部にあたる可能性が高い。

### C 第1遺構面

近世以降の溝・土坑が確認された。

#### (3) 遺物の概要（図8）

本調査地点では、コンテナ12箱分の遺物が出土した。種類は、土器・陶磁器・瓦・石器・鉄製品などである。ここでは、SK304・SK207・SD212から出土した遺物について報告する。1はSK304から出土した弥生土器の壺で、ほぼ完形品である。弥生時代前期末に位置づけられる。2～7はSK207から出土した弥生土器の甕・高壺・壺である。後期～終末期の所産で、不安定な底部を有する7は終末期に位置づけてよかろう。8・9はSK207から出土した石器で、8は紅簾石片岩製の打製石庖丁、9は頁岩製の扁平片刃石斧である。10はSD212から出土した棒状の鉄製品である。鑄のため、器種は確定しがたいが、鉄鎌であろうか。

## IV まとめ

本調査地点では、弥生時代前期～近世の遺構と遺物が確認された。弥生時代前期末の土坑（土器埋納遺構）、弥生時代終末期の溝・土坑とともに、それぞれの時期における居住地としての土地利用を示すものである。また、本遺跡における、近世の条理地割溝の検出例が新たに追加されることとなった。これらは、弥生時代の集落像、あるいは近世の農村像の解明に寄与する成果である。

なお、以上の内容は暫定的なものであり、今後、詳細な検討を経て正式報告を行う。

## 文献

- 勝浦康守, 1999. 南蔵本遺跡（住宅開発工事）. 徳島市教育委員会（編），徳島市埋蔵文化財発掘調査概要9. 徳島市教育委員会，徳島，pp.1-25.
- 勝浦康守編, 1990. 名東遺跡発掘調査概要. 名東遺跡発掘調査委員会.
- 勝浦康守編, 1997. 三谷遺跡.
- 近藤玲, 2012. 徳島市眉山周辺の弥生集落遺跡の動態. 真朱 10, 31-48.
- 近藤玲編, 2014. 南蔵本遺跡.
- 中村豊, 2000. 阿波地域における弥生時代前期の土器編年. 田崎博之（編），突帯文と遠賀川. 土器持寄会論文集刊行会，松山，pp.471-498.
- 中村豊, 2006. 鮎喰川下流東岸地域における弥生中期後葉集落の動態. 日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会（編），日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集. 日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会，松山，pp.199-206.
- 中村豊, 2016. 徳島市三谷遺跡の研究1－徳大1・2次発掘調査成果から－. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要2, 3-24.
- 中村豊, 2017. 徳島市三谷遺跡の研究2－徳大3・4次発掘調査成果から－. 中村豊（編）縄文／弥生移行期における農耕の実態解明に関する研究. 徳島大学大学院総合科学部，徳島，pp.23-43.
- 徳島県教育委員会, 2006. 徳島県遺跡地図.
- 北條芳隆編, 1998. 庄・蔵本遺跡1. 徳島大学埋蔵文化財調査室.
- 三宅良明, 1995. 南庄遺跡発掘調査概要. 徳島市埋蔵文化財発掘調査概要5. 徳島市教育委員会，徳島，pp.1-14.

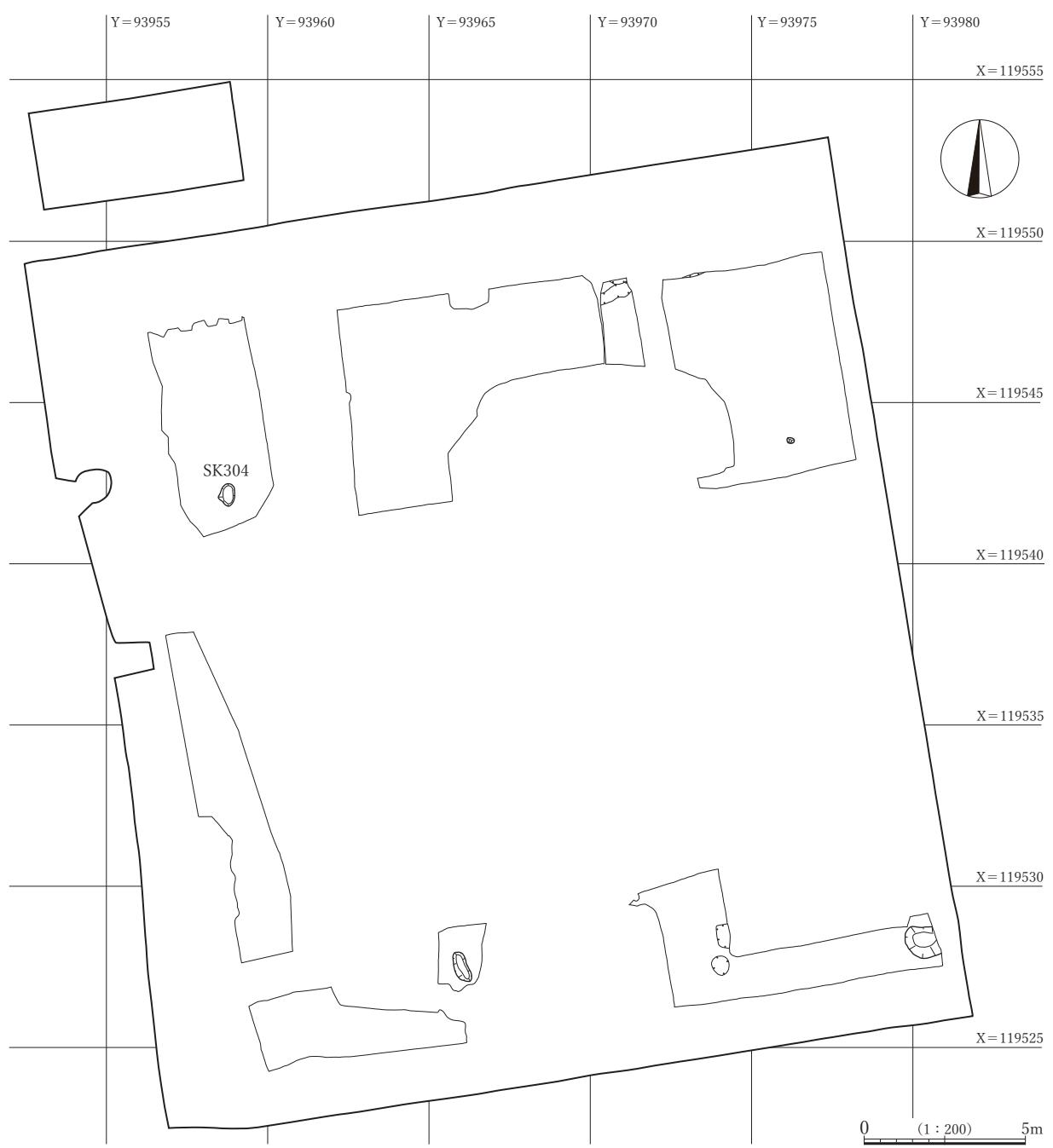


図6 第3遺構面全体図

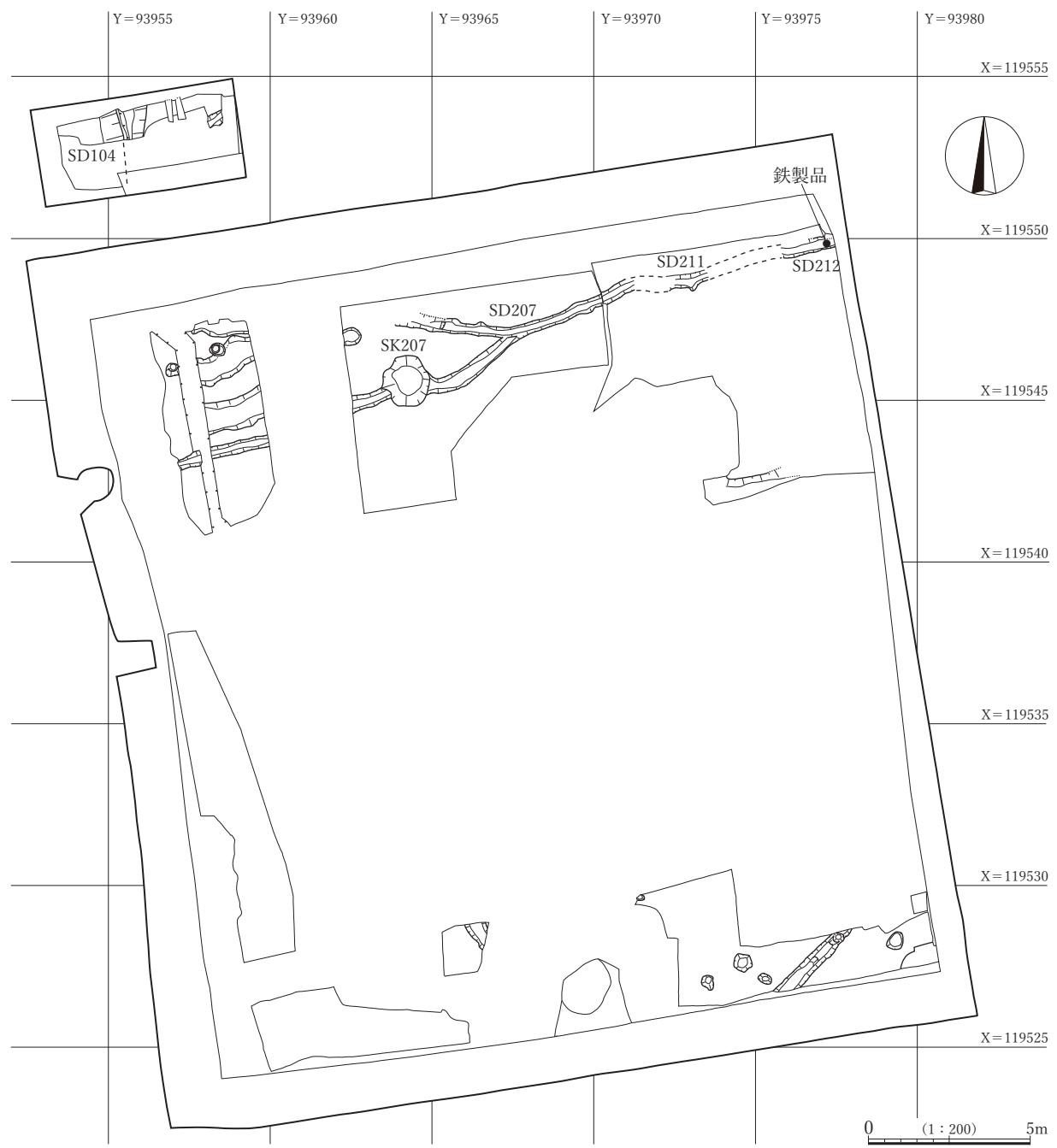


図7 第2遺構面全体図

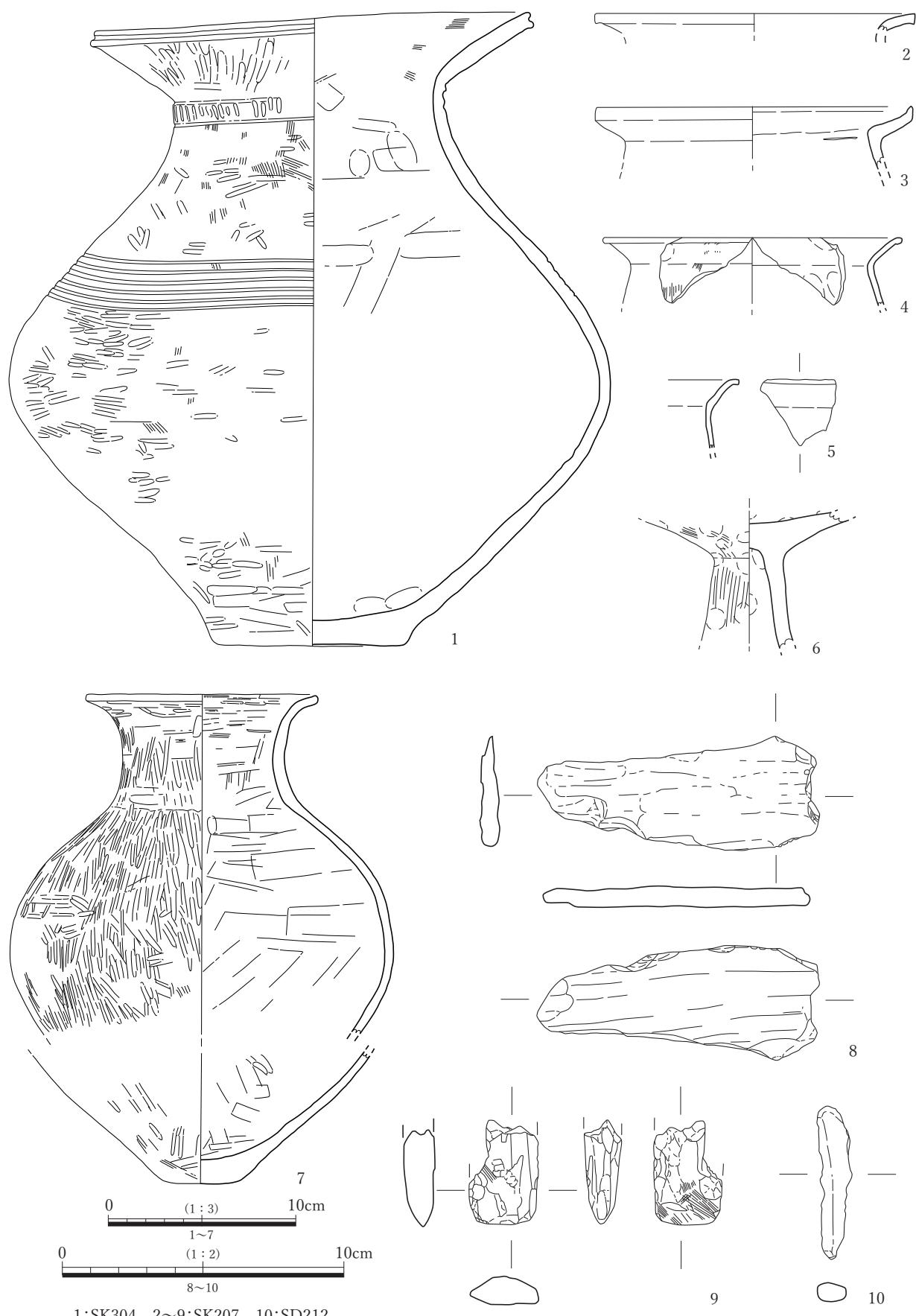


図8 出土遺物



写真1 調査地点全景（西から）



写真2 東区A地点東壁土層断面（西から）



写真3 SK304 完掘状況（北から）



写真4 SD207 検出状況（東から）



写真5 SD207 完掘状況（東から）



写真6 SK207 遺物出土状況（東から）



写真7 SD212 鉄製品出土状況（西から）



写真8 SD104 完掘状況（南から）



2025 年 11 月 30 日発行

## 庄・蔵本遺跡

第 36 次調査（エネルギーセンター地点）発掘調査概要報告書

編集・発行 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

徳島市南常三島町 2 丁目 1 番地 (088)656-9405

<http://tokudaimaibun.jp/>